

## Message

## 不断の学びとしての教育

総長 法学部教授 吉岡知哉

小鳥のひなも巣立つまでに親鳥から飛び方を学ばなければならないのですから、高度な文明を作り上げた人類にとって、教育が最も重要な意味をもつ営みであることは言うまでもないことでしょう。しかし教育とはなにか、教育はいかにあるべきかと考えようとするやいなや、私たちは戸惑いと不安を感じざるをえません。ルソーは『エミール』のなかで、人間を教育するには、それにふさわしい教師がいなければならないが、その教師を育てるためにはさらにまたその教師がいなければならない、「教育から教育へと、どこかわからないところまで遡らなければならない」と述べています。ソクラテスも、知の教師を自称するソフィストたちに対して、人間的卓越を教えることは不可能だと批判し、『ゴルギアス』では、弁論術を見せかけと説得のための技術にすぎないと喝破しています。ルソーやソクラテスの主張に賛同するかどうかは別として、教育が人間存在の根源に関わるものであり、それゆえに本質的な困難を抱えたものであるという点に、私

たちは意識的であるべきでしょう。

成果が判定しにくいという特徴もまた、教育の本質に根ざすものです。何をもって成果とするのか、基準はどのように立てるべきなのか。それ自体が検討されるべき課題にほかなりません。それに、成果は本人に自覚されるとは限りませんし、20年後、30年後、時には次の世代になって現れるかもしれないのです。

けれどもこのことは、様々な指標を立てて、教育の試みを検証する作業を否定するものではありません。それどころか、絶対的な指標のないところで、繰り返し指標をたてつつその指標の検証を行い、教育の本質と方法について不断に学び問う以外に、そもそも教育という営みが成立し得ないことは明らかです。

大学教育開発・支援センターの仕事は、教育という人間的営みが持つ困難性と可能性を、目に見える形にして私たちに示し問いかけているのです。



## センターメンバー

センター長	佐藤 文広 (理学部教授・理学部長)
副センター長	松本 茂 (経営学部教授)
	松山 真 (コミュニティ福祉学部教授)
センター員	野呂 芳明 (社会学部教授)
	河野 哲也 (文学部教授)
	佐々木 卓也 (法学部教授 2010年9月30日まで)
	小川 有美 (法学部教授 2010年10月1日より)
学術調査員	吉田 重和 (2010年4～9月)
	久保田 祐歌
顧問	寺崎 昌男
事務局	今田 晶子
	伊藤 直子
	村田 浩輔
	松井 絵里香

## CONTENTS

- 1 総長からのメッセージ／不断の学びとしての教育
- 2 前期シンポジウム  
「グローバル化に対応する大学教育の在り方」報告
- 3 2010年度第1回FDワークショップ報告
- 4 立教トピックス/ Honours—研究と教育の好循環の要
- 5 立教GP2009年度活動報告会参加レポート
- 6 学術調査員紹介
- 7 お知らせ
- 8 編集後記

前期シンポジウム報告  
(2010年7月13日開催)

## グローバル化に対応する大学教育の在り方 —東アジアの高等教育における質改善への取組に学ぶ—

大学教育開発・支援センター副センター長／経営学部教授 松本 茂

急速に進む経済や社会のグローバル化に対応しつつ、教育の質をどのように保証していくのかということは、立教大学を含め、わが国の高等教育機関にとって緊急の課題となっている。そこで、弊センターは、7月13日に「グローバル化に対応する大学教育の在り方—東アジアの高等教育における質改善への取組に学ぶ—」というタイトルのシンポジウムを開催した。当日は、まず金子元久氏（東京大学名誉教授、独立行政法人国立大学財務・経営センター教授）に、「東アジアの高等教育と日本」という演題でお話をいただき、次に、尾崎俊哉氏（本学経営学部教授）に「立教大学経営学部 グローバル人材育成の取り組み」というタイトルでご報告いただいた。その後、フロアから両講師への質問を受ける形でディス

金子氏



カッションを進めた。

金子氏は、豊富なデータをもとに、東アジア諸国および日本の高等教育と関連する領域についての分析を提示され、企業のグローバル化は国内の雇用問題に影響を与え、高等教育機関の入学者の質を変えたという指摘をされた。そして、「学生の人間的成熟のため」という教養教育の

本来の目的を再認識したうえで学士課程教育を改善する必要性を説かれるとともに、1年程度の留学プログラムを強化することの意義を主張された。

尾崎氏は、グローバル化に伴う日本企業の変貌ぶりについて分析したうえで、経営学部が創設以来取り組んできた交換留学制度を含むグ

尾崎氏



ローバル化戦略について事例を交えて報告された。フロアとのディスカッションでは、「英語の立教」を標榜しているわりには、（英語圏以外を含め）在学中に1学期以上の留学を体験する学生の割合が、全国平均と比べて低いレベルであることが問題として共有された。

このシンポジウムがきっかけとなり、本学においても、グローバル化時代における学士課程教育の抜本的な改革に向けての論議が高まることを期待する。

\*シンポジウムの詳細な内容が記録された、大学教育開発研究シリーズ No.12「グローバル化に対応する大学教育の在り方」は、10月の発行を予定しています。

2010年度 第1回  
FDワークショップ報告  
(6月15日開催)

## 「基礎演習（リーダーシップ入門）」授業見学 —18クラス370人で同じ内容のリーダーシップ開発授業—

経営学部教授 日向野 幹也

各学部・学科で行われている授業を見学し、授業改善のヒントを探るFDワークショップ「授業見学」を昨年度より開催しています。授業見学の後に、授業担当者と参加者の間で教授法や授業運営の方法について意見交換を行うプログラムです。

2010年度第1回は、日向野幹也教授「基礎演習（リーダーシップ入門）」を見学しました。本授業は18人の教員が同一時間帯に各クラスを担当し、共通シラバスを用いています。日向野教授は授業を担当するだけでなく、18クラス全体のコーディネータでもあります。各クラスの学生は、課題「モスバーガーを若い人に食べてもらうにはどうしたらよいか」の解決策をグループで考え、プレゼンテーションを改善していきます。

見学日の6月15日（火）は、前回の授業で（株）モスフードサービスの社員から受けた指摘に基づく解決策が発表されました。日

向野教授からは、どのように改善したのか、どうするとよりよくなるのかについてアドバイスがなされました。授業の進行役はSA（スチューデント・アシスタント）が務め、各グループに発表をさせ、質疑応答を行う他、共通スライドに沿って経営学の知識の一部も教えます。学生は4P（Product/ Place/Promotion/Price）を学び、これを活かした解決策をグループで話し合いました。

授業見学後の意見交換会では、日向野教授から、経験と振り返りを交互に繰り返すことにより、プロジェクト型の学習を効果的に行う工夫やSAの果たす役割についてお話いただきました。その後、SAの研修方法や授業打ち合わせの仕方、グループワークへの教員の関与の度合い、グループワーク主体の授業における成績評価の方法などについて意見交換が行われました。

学術調査員 久保田 祐歌

## Honours—研究と教育の好循環の要

経済学部准教授 小澤 康裕

現在、私が客員研究員としてお世話になっているニューサウス・ウェールズ大学(University of New South Wales 以下、UNSW)は、シドニーにあるオーストラリア屈指の総合大学です。昨年、創立60周年を迎えた新しい大学ですが、オーストラリアの教育・研究分野をリードする8大学で構成された「The Group of Eight」(グループ・オブ・エイト)のメンバーであり、さらに、研究活動に力を注ぐ世界の有名大学により組織された国際的な大学連合「universitas21」(ユニバーシタス21)にも加盟しています。

UNSWは、シドニーの中心地から南東へ5 kmほどの所にあり、さらに東へ2、3 kmほどの徒歩圏内にはきれいなビーチが広がっています。10学部にて4万5千人程の学生が学んでいますが、そのうち世界130カ国からの留学生が1万人弱、特に、アジアからの留学生が多く、キャンパス内で見かける学生は、日本の大学よりも黒髪の学生の比率が高いのではないかと思います。教職員も学生同様にとっても国際色豊かです。もちろん、授業はすべて英語で行われますが、いわゆるオージー・イングリッシュばかりではなく、自動的に、世界各国の訛りのある英語での授業を受けられるという特典(?)もついています。

ところで、UNSWだけでなく、オーストラリアの大学は、いわゆる教養教育を行わず(教養教育は高校で行うようです)、1年次から専門教育を行い、一部の学科を除いて、通常、3年間で学士(Bachelor)を取得します。ただし、学士課程を優秀な成績で修了した学生は、1年間の専門研究コースHonoursに進むこともできます。私が所属するSchool of AccountingのHonoursの学生は、博士課程の大学院生向けの授業にも出席し適確な質問をし、卒業論文を作成します。彼らはみな、とても優秀で、専門的な学術論文を読みこなし、きわめてレベルの高い卒業論文を完成させます。その一部は、指導教員との共著という形で、学術雑誌に投



稿され、掲載されるほ  
どです。私は、日本での  
学部教育において、「こ  
こまでで十分だろう」と  
一方的に判断し、学生  
の潜在的な能力を過小  
評価してきたのではな  
いかと、大いに反省しま  
した。

Honoursの学生は教  
育においてもその能力  
を発揮します。School  
of Accountingの大規模講義(受講者が500人近い授業がありま  
す)には、Honoursの学生が、チューターとして、演習形式の少人数  
クラス(20人から30人程度の規模)を担当しています。つまり、  
大規模講義と同時に、毎週、その講義に付随する20クラス以上の  
演習形式の授業が展開され、Honoursの学生によるきめ細かい  
指導・サポートが行われます。彼らは、教員から与えられる課題に  
取り組む後輩を指導しつつ、受講者の反応を教員に伝えるという  
役割を果たしています。このような教育環境が、学生の勉学意欲  
を高めるのに大いに役立っているようです。

UNSWのSchool of Accountingにおいては、このようにHonours  
の学生、そしてHonours出身の大学院生が、研究と教育の両面にお  
いて、たいへん活躍しています。Honoursの学生は、教員と密接  
に結びつき、School全体の研究と教育のレベルアップのために  
きわめてよい循環を生み出しているのです。

Honoursという制度は日本の大学にはありませんが、例えば、  
立教大学経済学部には、特別進学生という制度があります。大学  
4年時に大学院の講義や演習を受講し、大学院に進学後、1年  
で修士論文を作成し、修了するという制度です。現在、この特別進  
学生は、通常の学生や大学院生と同じように、授業を受けていま  
すが、きっと、彼らは、Honoursの学生たちのようにもって研究と  
教育の両面で活躍できる素養があるはずで、帰国後は、彼らの  
潜在能力を引き出し、さらに研究と教育の好循環を作り出して  
いきたいと考えています。



### 後期シンポジウム

「大学生の社会的・職業的自立に  
向けた教養教育の在り方」

[日時]

2010年10月26日(火) 18:20~20:00

[場所]

池袋キャンパス 太刀川記念館3階多目的ホール

[講演者]

藤田 英典氏(文学部教授)

### 2010年度 FDワークショップ「授業見学」

第2回:「“理系”型科目は壁か?でも自然のすばらしさを理解してほしい」

全力リ 総合A「地球の理解」山本 博聖(理学部教授)

2010年11月16日(火)1限(授業見学後に意見交換会を実施)@池袋キャンパス

第3回:「『知識を知り、自分を知り、実践する』ための工夫」

全力リ 総合A「からだの科学」大石 和男(コミュニティ福祉学部教授)

2010年11月22日(月)2限(授業見学後に意見交換会を実施)@新座キャンパス

本学では、教育効果の高いプログラムを支援し、教育の活性化と高度化に資することを目的として、2009年度より「立教大学教育活動推進助成(立教GP)」制度を設けています。2009年度から助成を受けているプログラムの活動報告会が、7月22日(木)に太刀川記念館で開催されました。

報告会では、次の6つのプログラムの代表者が取り組みを報告し、質疑応答を行いました。

- (1) 法学部「学生による国際ビジネス法に関する企業内調査と最新の実務を反映させた「生きた」教材の作成」
- (2) 経営学研究科『『国際的な知のアライアンス』による『ダブル・ディグリー・グローバル・ビジネスリーダー・プログラム(DGBP)』』
- (3) 経済学部「初年次教育における学習意識と基礎能力の育成プログラム」
- (4) 新座キャンパス事務部、キャリア教育オフィス「新座キャンパスブリッジプロジェクト～学生参画による地域連携の展望を探る～」
- (5) 図書館「立教GP申請・実施チーム「図書館における学習支援」
- (6) 文学研究科超域文化学専攻「超域文化学専攻におけるフィールドワーク教育の体系化—危機管理とアシスト体制づくり—」

とくに興味深かったのが、早川吉尚先生が報告された法学部の取り組みです。学生に国際ビジネス法に関する企業内調査をさせ、教材の基礎資料に当たるものを学生自身が作り上げることが本プログラムの目玉です。2009年度の取り組みとしては、調査対象となる企業の選定が行われました。プログラムの趣旨・意義に賛同した5つの企業とのネットワークが構築され、今年度は、学生が対象企業を調査するパイロット・プログラムが始まっています。選考を経た学生が企業に派遣され、海外駐在経験者に日本との制度や文化の違いから生じた問題や事例等についてインタビューをしたり、資料収集を行います。学生が作成するレポートは、講義やテキスト『講座 国際ビジネス法』の改訂やアップデートに利用されます。学生には、履歴書やレポートの書き方、インタビューの仕方等、社会人としての作法という点で課題がありますが、非常にやる気のある学生ばかりなので成果が楽しみであるとのこと報告でした。

法学部の取り組みを始め、教育改善のための多様な試みが教職員によって行われています。こうした活動を大学全体として財政的に支援し、その内容を共有する機会をもつことの意義を実感した報告会でした。

## 学術調査員紹介

Research Fellow

### 久保田 祐歌

くぼた・ゆか / 学術調査員

今年4月に名古屋から参り、学術調査員として勤務しています。哲学(教育)、高等教育論を専門分野とし、クリティカルシンキングやライティング教育に関する研究を続けています。立教生の「学び」がさらに充実したものとなることを願って、リーフレット〈Master of Writing〉の開発や、「授業見学」などのFDプログラムの企画・実施に取り組んでいます。



## お知らせ

### リーフレット〈Master of Writing〉をご活用ください

初心者向けにレポート等の書き方を伝えるリーフレットを作成しています。これまでに、「No.1レポートとは」「No.2 レポートの構成」「No.3 引用・参考とその表記法」「No.4 メールのマナー」を発行しています。これらのリーフレットは、池袋キャンパス大学教育開発・支援センター前、新座キャンパスで配布している他、下記URLからもダウンロードできます。

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/journal/leaflet/>  
今後も、論理的な文章の書き方や文献検索に関するリーフレットを発行していく予定です。



## 編集後記

本号では、経済学部の小澤康裕先生から、客員研究員としてご滞在中のニューサウス・ウェールズ大学の学部教育制度「Honours」についてご寄稿いただきました。

今後も、本学での取り組みに資する学内外の実践を共有できるよう発信していきたいと思っています。

(久保田)

## 「MOVE 第6号」

立教大学 大学教育開発・支援センター ニュースレター  
2010年9月30日発行

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター  
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1  
Tel: 03-3985-4623 Fax: 03-3985-4615  
E-mail: cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>